目　次

とんがりモミの木の郷　5
シラサギ　189
ミス・テンピーの通夜　209
ベッツィーの失踪　229
シンシーおばさん　267
マーサの大事な人　295
訳者解説　329
ジュエット略年譜

とんがりモミの木の郷

一　再訪

海辺の町ダネット・ランディングには、メイン州東岸の他の町にはない魅力を感じさせるところがあった。あのあたりのことはよく知っているからなつかしく思うだけのことなのだろうか。岩だらけの海岸、黒い森、そして波止場のそばの岩棚にしっかりと押し込まれ、木釘で留められたような、まばらな家々に惹きつけられるのも――。これらの家々は海を見渡す眺望を大事にし、庭は小さくとも必ず花をいっぱいに植えて明るくしていた。急勾配の破風の一番上にある小さなガラス窓は、注意怠りない目のようだった――港とその向こうの遠い水平線を見張っていたり、あるいは北に続く海岸と後ろに広がるトウヒやバルサムモミの林を眺めていたり――。このような町とその周りの地域を知るということは、一人の人間と知り合いになるようなものである。一目見て恋に落

ちる過程はあっという間で決定的だが、真の友情を育むのは一生の仕事になるのかもしれない。

二、三年前の夏にヨットの旅の途中で初めて立ち寄って、わたしはダネット・ランディングに魅せられたのだったが、今回再訪してみると、とんがりモミの木の郷(さと)は以前のままだった。相変わらず慣例尊重の意識の強い、古風な町の印象も、よそよそしさも、ここが世界の中心だと素朴に信じているところも、なつかしく夢で見た思い出のとおり、少しも変わっていない。六月のある日の夕方、わたしは一人の乗客として、汽船から埠頭に降り立った。満潮で見物人がたくさん集まっており、中でも幼い者たちは控えめな興奮を胸に、乗客の後について、潮の香りのする小さな町の、白い羽目板の目立つ狭い通りを歩いて行った。

二　ミセス・トッド

後になってわかったことだが、わたしが夏の滞在先に選んだこの家には一つだけ欠点があった。それは外界と離れた暮らしがまったくできないことだった。最初、一角だけが通りに接しているミセス・アルマイラ・トッドの小さな家は、騒がしい世の中を避けるのにもってこいの奥まった場所に見えた。家の前には緑の生い茂った小さな庭があり、

花をつけた植物といえば二、三本の色鮮やかなタチアオイと何本かのヒカゲユキノシタだけで、それらはすべて灰色の板壁に押しつけられている。数少ない花が、旺盛に茂る緑に押しやられている様子が風変わりで、新来の者はいささか戸惑いを覚えるような庭なのだ。しかし間もなくわかったのは、ミセス・トッドが野生・栽培種を問わず、あらゆる薬草（ハーブ）の熱心な愛好家であることだった。海風はその家の窓辺に、野バラの香りだけでなく、セイヨウヤマハッカ、セージ、ルリチシャ、ミント、ヨモギ、キダチヨモギなどの香りを運んできた。とくにミセス・トッドが薬草園の一番隅の区画に行くような時には、タイムをぎゅっと踏みつけて、その香りで居場所を広く知らせることになった。夫人はとても大柄だったので、たとえ足で踏まれなくても、細い茎は必ずと言っていいほど、そのたっぷりしたスカートに触れてひしゃげたからだ。まだまどろみの中にいる朝でも、夫人が庭に出れば間違いなくわかるし、二、三週間するうちには、庭のどこにいるかまで正確に当てられるようになるのだった。

　この薬草園の一画には、野趣に富む薬種が生えており、それらは普通の薬草より大事にされている珍種だった。鼻を突くような変わった匂いがして、忘れ去られた過去がおぼろげに浮かんでくるような気持ちにさせる。それらの薬草の中には、かつて聖なる秘儀に使われ、秘密の教えとして何世紀にもわたって伝えられたものがあるかもしれなか

ったが、今ではミセス・トッドの台所のストーブにかけられた鍋で、糖蜜、酢、蒸留酒などとともに煎じ出される、つつましい役割に甘んじている。そして、まるで人目を忍ぶかのようにたいていは夜の間に、詰め替え用の小さな古めかしい薬瓶を携えてくる、近隣の病人たちに処方されていた。たとえばインディアンレメディと呼ばれる秘薬の値段はたった十五セントで、使用法は買い手が窓の外を通る時にそっとささやかれるのみだった。ミセス・トッドは余計な手順を省く人だったので、大部分の薬は特に台所からの注意もなしに出された。だが一部の薬に関しては、夫人が戸口に立って指示を与えることがあり、中には夫人が門まで一緒に歩きながら、つぶやくように詳しい説明を続ける場合もあって、重大な秘密めいた雰囲気が終始漂うのだった。夫人が相手にするのは普通の病気だけではなかったのかもしれない。時には愛、憎悪、嫉妬、それに海上の逆風にまで、夫人の庭の珍しい植物を使えば効果的な薬が出来そうに思えることがあるのだった。

町のドクターと、薬草に通じた夫人とは、とても仲が良かった。ドクターとしては、夫人の調合した薬で望ましくない副作用が出た場合、多分自分なら和らげることができるという考えがあったのかもしれない。ともかく、時々ミセス・トッドのところに立ち寄っては、棒杭で作られた柵越しに挨拶を交わしていた。二人の会話は、前置きもそこ

そこに本題に入り、ドクターはよく、香りのよい小枝を指でくるくる回しながら、含みのある冗談を言った。フジバカマで作る万能薬に抱いておられるあなたの信念は、ご立派な隣人の皆様の健康と、時には命とさえ引きかえにしても構わないほどとみえますね、などと言うのだった。

薬草を摘むのに忙しくなり始めたばかりの六月末に、この静かな町に到着するということは、同時にミセス・トッドの、トウヒと糖蜜でつくる昔ながらのスプルースビール醸造作業の最盛期の始まりに到着するということでもあった。この爽やかなビールは長年にわたる試行錯誤の末に素晴らしい完成度に達しており、近隣で大変な評判を呼んでいたため、しょっちゅう品切れになって補充が必要になるのであった。誰にも邪魔されずに引き籠る日々をわたしは期待していたが、他の点では非の打ちどころのないこの土地であっても、さまざまの理由からそれだけは非常に難しいことがわかってきた。家主である夫人とわたしとの間の取り決めでは、正午には簡単な昼食とし、その代わりに夕方は温かい料理をたっぷりということになっていたので、それに備えて時折午後に、わたしはベラ釣りの釣糸を手に道を急ぐことがあった。このやり方なら、ミセス・トッドが余裕をもって森や草地で薬草を集める作業に専念できることもしだいにわかってきた。暑い季節の間はスプルースビールの注文はとぎれずにあったし、各種の鎮静シロップや

特効薬の求めも多かった。薬については、ここに住むようになって以来、物好きにも興味を抱くようになっていたため、わたしも精通するようになっていた。未亡人であるミセス・トッドの生計を支えるものとしては、この細々とした仕事と、食欲旺盛なただ一人の下宿人であるわたしの家賃の他にほとんどないことを知っていたので、わたしはすぐに自分のエネルギーと興味を夫人の手助けにまわすようになった。その結果、お天気が良ければ夫人は外に出かけ、ドアをたたく訪問者にはわたしが応対するのが日常となった。

夫人と一緒に時々散歩をして知識を得たり、頻繁に留守にする夫人に代わって相棒としての役割を果たしたりするうちに、七月はあっという間に過ぎた。ある晩、その日一日で集まった売り上げ二ドル二十七セントを大きな誇りと喜びをもって並べた時に初めてわたしは、書くと約束していて既にすっかり遅れてしまっている原稿のことを思い出した。親しい呼びかけと共に肩を優しくたたかれ、思いがけない早生のマッシュルームを夕食にいただき、一日に二ドル二十七セントの収入という栄えある結果を上げた後に、この成功から手を引いてすべてやめます、と宣言するのには強い覚悟が必要だった。文筆の仕事はどうしても不安定なもので、わたしの場合も、良心の声が丸い小石の浜の波音より耳に大きく響いてきて初めて、薄情な撤退宣言を夫人に言い出したのだった。わ

たしたちが「みなさんのお相手」と呼ぶ仕事を残念ながらわたしはもうできなくなりました、とはっきり告げると、夫人はいっそう優しい表情になりつつも、予想通りがっかりした様子だった。さまざまの野生の薬草を集める大切な季節に夫人の活動を制約してしまうことは、近隣一帯の人びとにも不人情なことだったろう。夫人の薬草は、冬の間の病苦を和らげるものとして、あてにされているのだから。

ミセス・トッドは悲しそうに答えた。「ええ、あなたがここにいてくれたので、それを大いに利用させてもらったわ。こんなにうまくいったシーズンは何年もなかったし、あなたみたいに信頼できる人は、他にいたことがないもの。あなたに欠けているのは、ほんのいくつかの点だけ。時間がたてば経験と見識が身について、とても有能になるでしょう。それは自信をもって言えるわ」

仕事上の関係にこうした変化があったにもかかわらず、ミセス・トッドとわたしは疎遠になったりしなかった。むしろ親密さが深まり始めたようだった。露が降り、月が高く上がって、海から涼しい風が吹いてくる夕刻に、ときおり強い香りを放つのはどの薬草だったのか、わたしは知らない。だがそんな時にミセス・トッドは、誰かに話をせずにいられなくなるようで、わたしは大喜びで聞き手になった。二人ともそんな空気に魅

了され、夫人は窓の外から声をかけることもあったし、あるいは何か口実を作ってわたしの部屋に来ることもあった。話す内容は、その日のありふれた出来事のこともあれば、霧深いある夏の夜のように、心の奥に秘めた事柄のこともあった。夫人がかつて、ずっと身分が上の人を愛したことがあるのを知らされたのも、こういう時のことだった。

「いえね、その人は一度だって、わたしのことを本気で想ってくれたためしはないの。二人が若かった頃、彼のお母さんはわたしたちの結婚に反対で、仲を裂くために、ありとあらゆることをしたわ。その後二人ともそれぞれ、申し分のない結婚をしたと人には思われたけど、どちらもそれは一番望んでいた縁組ではなかったわけ。そして時がたち、今ではどちらも一人になって、そうしたければいつでも一緒にいられるでしょう。と言っても、彼は船乗り風情とは違う上層階級の出で、もっとも成功した人たちの一人。そしてわたしは平凡な働き者として生きる運命。もう何年も会ってないし、昔の気持ちもきっと忘れたでしょうね。でも、女の心は違うわ。終わったと思った感情が戻って来る——春が毎年必ずめぐってくるように。それにわたし、いつだって彼の噂をききのがさないようにしてるから」

夫人が立っていたのは敷物の真ん中で、そこに編みこまれた黒と灰色の輪が薄暗い光を受けて足元を回っているように見えた。天井の低い部屋に立つ、長身でがっしりした

夫人の姿は、巨体の女預言者を思わせた。小さな庭からは、神秘的な薬草の不思議な香りが風に乗って流れてきた。

三　校舎

その後の数日間、ミセス・トッドを訪れては帰って行く薬の買い手たちの姿が、わたしの部屋の窓の外に見られた。そして干し草作りの時期が終わりにさしかかると、遠くまで知れ渡った夫人の評判を示すように、海から離れた土地からも新来のお客が来始めた。時々見かけたのは、真夏まで残ってしまったアネモネのように青白い若い人で、肺病による衰弱が悲しげな顔にはっきり見てとれた。しかしもっと頻繁に見かけたのは、農場から連れ立ってやってくる、働き者らしく疲れた様子の、がっしりした二人の女性だった。ミセス・トッドに向かって自分たちの症状を朗らかな大声で述べたてる様子からは、治療のアドバイスを得る機会と親しいお喋りの楽しみを結びつけていることが明らかだった。二人は自分たちの病気を治すことに関する知識をかなり詳しく話しているようで、ミセス・トッドにとっても得るところが大きいことに、わたしは気づいた。けれども、夫人は常に指導的立場をとり、話を締めくくる「ヤナギハッカを一握りね」(薬草はいろいろだったが)という指示は、無言の敬意をもって受け入れられていた。そん

なある日の午後、ことに活発に個人的な会話が続き、それを聞いていたわたしは(耳に綿を詰めてでもいない限り、聞かずにいるのは無理だった)、手に持ったペンを動かすこともまったく忘れて笑った。そしてまた続きに耳を傾けたりしている自分に気づき、帽子に手を伸ばすと、吸取紙など文房具一式を脇に抱え、それ以上の誘惑から逃れるため、決然として外に出た。かぐわしい緑の庭の脇を過ぎ、ほこりっぽい道を行くと、道はまっすぐ上りになる。ほどなくわたしは足を止めて振り返った。

ちょうど満潮で、広い港は深い森に囲まれ、木造の小さな家々が埠頭ぎりぎりの場所まで立っていた。ミセス・トッドの家は、中でも海から一番遠い地点にあった。岩だらけの海岸にある灰色の岩棚は、大部分が芝土で覆われ、ヤマモモと野バラが生い茂っていた。海から離れて上に広がる土地、点在する農地——そして丘の縁には小さな白い校舎が立っている。吹きさらしで、かなり傷んでいるが、船乗りたちにとっての目印であり、その戸口に立つと、岸から海へと広がる素晴らしい景色が望めるのだった。ちょうど夏休みの最中のことで、ドアに錠がおろされていないのを知ると、わたしは校舎に入り、海に向かう窓の一つからゆっくりと外を眺めた。そしてその後、そばのヤマモモの茂みに囲まれた日陰の場所でしばらく思案した末、町の中心部に戻ると、二人の行政委員——ダネット・ランディングの権力を握っている兄弟なのだが——に笑われながらも、